

体験学習プログラム 参加学生レポート集

2022年度8月実施分(2021年度2月実施予定からの振替実施分)

国内体験学習プログラム

福島スタディツアー

「福島の“今”を見、福島を生きる人々の言葉を聴き、
そして“自分”を見つめる」

○国内体験学習プログラム／福島スタディツアー【春季】

■参加学生	
辻元 一貴（国際学部グローバルスタディーズ学科 4年次生）	河部 蒼真（先端理工学部・応用化学課程 3年次生）
伊野 涼雅（政策学部・政策学科 3年次生）	太田 雄斗（文学部・真宗学科 2年次生）
図師 菜々香（社会学部 現代福祉学科 2年次生）	中村 あや（社会学部 現代福祉学科 2年次生）
成川 雅妃（社会学部 現代福祉学科 2年次生）	田村 勝哉（政策学部・政策学科 2年次生）
■テーマ ～福島『今』を見、福島を生きる人々の『言葉』を聴き、そして『自分』を見つめる～	
■企画・引率 筒井のり子（ボランティア・NPO活動センター センター長／社会学部 教授） 竹田 純子（ボランティア・NPO活動センター ボランティアコーディネーター）	
■協力者・団体 特定非営利活動法人うつくしまブランチ、特定非営利活動法人 サポートセンターぴあ、社会福祉法人 南相馬市社会福祉協議会、特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ、阿部農園、農家民泊いちばん星、株式会社 小高ワーカーズベース	

1. 目的

ボランティア・NPO活動センターが実施する国内体験学習プログラムは、学生が、該当地域の地域住民やNPO／NGOとの交流を通じて、国内におけるその地域の抱える問題に触れるとともに、ボランティア等の体験学習を行うことにより、より深く社会の問題について考え、その問題解決に向けて自身の問題として考えるきっかけを作ること

を目的としています。
「福島スタディツアー」は2015年に開始し、以降、福島県のNPO訪問や地元住民との交流、町のフィールドワーク等を通して、津波・地震・原子力災害という複合災害が引き起こした課題と、そして課題解決に向けて市民がどのような活動を展開してきたのかなどについて、実際に現地を訪問して体感的に学びました。



2. プログラム内容

(1) 事前学習

2022年2月7日(月) 13:10～16:40

- ①東日本大震災～福島状況について～
筒井のり子ボランティア・NPO活動センター長（社会学部教授）のお話
- ②「小高ワーカーズベース」の挑戦

株式会社 小高ワーカーズベース
代表取締役 和田智行氏のお話

(2) 福島スタディツアー

2022年8月6日(土)～8月10日(水)

・1日目：8/6(土)

深草キャンパスを8:00に出発し、20:00前に福島県広野町にバスで到着しました。

車中では参加者同士が知り合うためのワークや福島県に関するクイズなどを行いました。

・2日目：8/7(日)

午前：・東日本大震災・原子力災害伝承館を見学し、語り部さんのお話を伺った。

・一般社団法人ふくしまリアリの菅野さんの案内で双葉町～浪江町周辺をフィールドワーク

昼食：道の駅 なみえ

午後：・震災遺構 請戸小学校の見学

・南相馬市に移動し、特定非営利活動法人サポートセンターぴあ 代表理事の青田氏から震災直後の福祉現場の様子やその経験を活かした現在の取り組み、「てんでんこ」の考え方についてお話を伺いました。

・一日のふりかえり

・3日目：8/8(月)

午前：農家民泊いちばん星の中を見学後、オーナーの星氏から南相馬市内にある海岸沿いの集落跡の慰霊碑やサーフィンの聖地と呼ばれる北泉海岸、相馬野馬追のメイン会場である雲雀ヶ原祭場地等をご案内いただきました。また、相馬野馬追で活躍する厩舎なども見学させていただきました。

昼食：里山キッチン

午後：・南相馬市社会福祉協議会を訪問し、地域福

社課の佐藤課長から、現在の南相馬市の様子や震災直後のことなどについてお聞きしました。

- ・福島市に移動。特定非営利活動法人 市民公益活動パートナーズの方々から、震災直後から現在に至るまでどのような活動をしてきたのか等についてお話をお聞きしました。

- ・一日のふりかえり

・4日目：8/9（火）

午前：・福島市にある梨農家の阿部農園を見学させていただき、震災後に安全な食べ物を作るためにどのような取組みをしたのか、現在の取組みについて話を伺いました。

- ・土湯温泉に移動し、昼食兼自由時間

午後：・特定非営利活動法人うつくしまブランチ
方々から、震災前、震災後の活動について話を伺いました。

- ・この4日間全体のふりかえり

20:30 に土湯を出発し、京都に向かいました。

・5日目：8/10（水）

朝、7:00 頃 京都駅を經由し、深草キャンパスに到着・解散。

（3）事後学習

11日（金） 9：30～11：40 （深草キャンパス）

事後学習までに、学生からレポートの提出と、アンケートへの回答などを通して頭を整理してもらってから事後学習を実施しました。

ここでは、帰京してから改めて考えたこと、取り組んだこと等について一人ひとり発表して共有した後、報告会で参加者に伝えたいことについて話し合いました。

※対面実施（一部オンライン参加）

（4）感染予防対策として、次の①～⑤をお願いしました。

①2週間前からの健康観察

②活動期間中の検温（毎日）

③手指の消毒、マスク着用、黙食等を徹底

④宿泊はシングルルームを使用

⑤出発の前日に、全員抗原検査を実施

3. コーディネーター所感

コロナ禍の影響で、2年間、実際に訪問することが止まり、やっと再開が決定しても出発間際に、次年度に延期が決定するなど、宿泊を伴う活動の再開は非常に困難でした。そんな状況下でしたが、改めて「百聞は一見に如かず」なのだと実感しました。

実際に行ってみなければ、参加学生達はここまで心が揺さぶられることはなかったと思います。ふりかえりの毎に、悩みながらも学生達の言葉が深まるのを感じていました。参加学生は学部も違えば学年も違い、当然のことながら一人ひとり興味範囲も知識量も違います。同じ体験をしても一人ひとりが異なった視点でじっくり語り合う時間はとても貴重でした。

泊りを伴うプログラムはリスクもありますが、学びの深さは圧倒的で、学生にとって必要な事だと痛感しました。

充実したプログラムになったと思いますが、残念だったことが2点あります。

1点目は、事前学習にも参加していた参加予定だった学生2名が直前に参加出来なくなってしまったことです。とても参加意欲の高い二人だったので本当に残念でなりませんでした。

2点目は、地元の人たち（今までは高齢者サロンなどを訪問し、一緒にお茶を飲んだりしながら交流をしていました）との交流が出来なかったことです。またいつか、こういった出会いの場をつくる事が出来ればと思います。

このような厳しい状況下で快く本プログラムに協力していただいた皆様には感謝しかありません。

本当に有難うございました。

〈報告者：竹田 純子

（深草キャンパス コーディネーター）〉

このスタディツアーに参加しようと思った理由は、福島現状を肌で感じ、知りたいと思ったからである。東日本大震災や原発事故に関する報道が少なくなってきた現在で、福島の復興はどこまで進んでいるのか、放射線の影響はどうか、福島の方が感じたことなどに注目していた。参加する前の知識として、原発付近の浜通りと飯舘村方面で放射性物質の被害が大きい、福島市や郡山市では全く問題なくどの産業も活発にできていると思っていた。

1 日目の広野町の宿から出発して大熊町に入ったあたりから衝撃だった。宮城県のスタディツアーにも参加したことがあるが、震災当時のままの建物を見たのは初めてで、震災の威力とまだ撤去ができない福島現状に衝撃を受けた。



震災当時のままの建物

星さんや市民公益活動パートナーズさんのお話を聞いて、原発事故後、福島市や郡山市にも放射性物質が相当降ったということがスタディツアーを通して一番驚いたし、怖かった。放射線の被害は帰還困難区域周辺での問題であり、内陸側では全く放射能の問題がないのに風評被害を受けているのだとさえ思っていたので、下水やダムにホットスポットがあるかも知れないという話や福島市でも除染を行っていたという話はとても興味深かつ

た。下水の放射性物質については、福島復興ステーション(2022)が毎年エリアごとの下水道終末処理場の数値を発表していて、年々下がっており今はほとんど放射性物質が検出されていないので安心した。逆に整備されていない森や川で遊ぶのは危険なのかなと感じた。

さっきも書いた通り福島市にも放射性物質が散布され除染も完璧ではないことを知って怖くなったので、環境省(2016)のサイトをもとに、人工放射性物質について帰ってから調べてみた。そして、原子力事故の際の被ばく予防策の共有が大事だと感じた。空気中に舞った放射性物質(特にプルトニウム)を吸い込まないようにすることが最初の被ばく対策になる。他にも空調や換気はどこまでしているのか、ホットスポットになりやすい場所などを国や自治体がもっと住民に共有してほしい。それが事故後の差別を予防し、安全に避難できることにつながるのではないかと。

また、摂取する食物を選ぶのも大事だと思った。年間 1mSv までなら大丈夫なものと計算方法もなんとなく分かった。加工された福島産のものは国産と表記されてしまい線量がわからなくなってしまうことなどわからないことと不安なこともまだあるけど、福島産のものに出会った時にどれくらいの数値なのか見ながら考えたい。風評被害の問題は消費者の忌避の簡単さにある。農家や漁師の安全のための苦勞に対して、消費者は福島産を簡単に避けられる。福島産を避けるなども同情で買うべきとも思わないけど、少しでも知る努力をして責任ある消費ができる社会になってほしい。色々調べたが、福島や放射能を知った気にならず日々知識を更新していけるよう頑張ります。福島また遊びに行きます。

私は今回のスタディツアーに「地球温暖化で脱炭素が騒がれている中で、原発事故を踏まえて原子力発電はどの様にするべきなのか」というテーマを持って参加していました。そのテーマの下、福島に入って最初に感じたのは「何これ」でした。道路にある気温の電光掲示板と見ていたら、 $0.068\mu\text{sV/h}$ と書いてある線量掲示板がありました。私は化学の学科に入っているので放射線の影響は長引くのは分かっていましたが、実際に線量掲示板を目にすると影響が「長引いているな」などの気持ちはなく、日本じゃないような、全くの別世界に来たような言葉にならない気持ちしかなくなりました。特に道の駅浪江の食堂の前に線量計が置かれていたのが衝撃で、線量計の横を虫網を持って歩いていた子どもを見て復興がどの様なものか分からなくなりました。



道の駅の前線量計の写真

その後、フィールドワーク・青田さんの話・星さんの話・清彦さんの話・・・と福島で過ごす中で私のテーマは分からないと感じました。これはテーマ以前に、話を聞いたり景色を見たりする中で分からないことだらけになったからです。津波で流された場所にソーラーパネルが建っているのは復興なのか、除染などを諦めただけなのか、でも住民は戻っていいのか、住民を戻していいのかなど1つのものに対してでさえ答えが出ない問題が多すぎました。私のテーマも答えなどない問題であり、

なにより私のテーマまで考えがたどり着きそうもありません。



津波で流された場所に建つソーラーパネル

分からないことだらけですが、学ぶことも多くありました。災害関連死が増える理由について、私はあまり良い印象を持っておらず少し自己責任と思っていた部分もありましたが、今回の病院でのトリアージや、病院から出たことによる設備不足や受け入れ先不足などの避難の困難性など話を聞き、納得がいったと共に、今までの自分の考えが恥ずかしくなりました。少し考えれば分かりそうなことですが考えようとしていなかった自分に驚きました。これからは物事を考える時は、常に背景を考えなければならないと改めて思いました。

トリアージや避難の困難性などの話は一切報道で表に出て来ないという話が言われるまで気づいていませんでした。他にも孤独死が起こると大きく報道されるという話に衝撃を受けました。私は育児放棄などによる子どもの死など報道が出た時、関連機関の見守りは足りていなかったとそのまま報道を受け取っていました。しかし、「週3回しか訪問していなかったと書かれているが、週3回誰かが家に訪問しに来るってどうだろう」という話を聞き自分が知らぬ間に報道の筋書きに誘導されていることに気づいたからです。私は自分で情報リテラシーの重要性は分かっていて、かなり持っていると思っていました。情報リテラシー

の重要性と難しさに気づくことが出来ました。これからはメディアなどの情報をしっかり考える癖を付けていかなければならないと思います。

分からないことだらけなまま心に引っかかりがあるままの今回のスタディツアーで分かったことは2つあります。1つ目は「人を傷つけるのは人である」ということです。浪江町住人を取り巻いた補償金による誹謗中傷など気持ちは分かるが言われた方も、言った方も傷つくだけ。難しいことですが常に理性を持って言葉を発する前に考えることが大切だと思いました。

2つ目は「多面的に捉えることの重要性」です。ソーラーパネルが復興なのか、災害関連死が増える理由、報道に出て来ない、間違っていない報道など今までの私の知識と現地の感覚のズレというようにいろんなところから情報を得ないと真実が見えてこないことが分かりました。今回スタディツアーに参加して沢山の情報、考えなければならぬことを知られて良かったです。まだまだ判断するための情報が足りないのでまた福島に行きたいです。そして出来れば私のテーマに答えが出せたら良いと思います。



伊野涼雅(政策学部政策学科3年次生)

今回の福島スタディツアーは、自身がこれまで抱いていた福島のイメージを覆し、新たな視点に出会う良い機会となった。これまでは福島といえば「原発」や「放射能」のことばかり連想していたが、現地の方々から震災や復興そして福島の今について、リアルなお話を聞いたことで、福島を身近に感じるようになり、そして、福島がとても魅力的な場所だと気づくことができた。そんな自分自

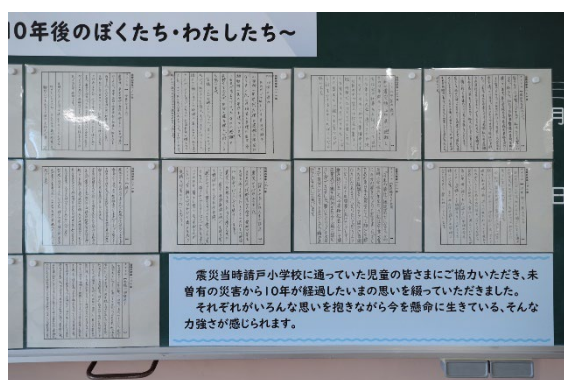
身の、福島スタディツアーで強く印象に残ったことや考えたことのうち、私は震災遺構である請戸小学校の見学で感じたことについて取り上げたい。

請戸小学校に関しては、このツアーに参加する以前から建物の写真だけは見知っていた。だから、受付を抜けて建物入口の手前にある、時計のついた階段を見たとき、記憶の片隅にあった写真が呼び起こされて身震いしたのを鮮明に覚えている。校内を見学するときも、小学生になった気持ちで視線を低くして見れば、あの教室の有り様からして、いかに津波が恐ろしいかは想像に難くない。まさかツアー開始早々にして恐れ of 感情をここまではっきりと抱くとは思ってもいなかった。一方で、恐れとは相反する感情を抱いたのも、また事実である。第一に、教職員を含めた学生全員が誰ひとりとして津波被害に合わず生還したことが、なぜ奇跡と言われるようになったのかを肌身で感じることができたということ。伝承館の語り部フィールドワークでも強調して伝えられていた「危険を想定することの大切さ」を実感することができた。第二に、教室に展示されていた文集「うけど」



請戸小学校 時間の止まった時計がある階段

を見て、自分の心が突き動かされるほどの衝撃を受けたということ。この文集には震災当時の請戸小学校の児童であった、自分と同世代の人たちの思いが綴られていた。同世代からの言葉は、直接心へ響くものがある。とくに浪江町という故郷への思い出を綴った文は、自分の生き方を考えさせられたとともに、生きる活力を分け与えてくれたように感じた。そして、その生きる活力というのは見方を変えると、福島復興の原動力なのではないかと考えた。この考えが適切かどうかはともかくとして、少なくとも請戸小学校の見学後、数日に



文集「うけど」の一部

渡って沢山の方々からお話を聞くうえで、『福島の今をどう見つめ、福島のこれからをどう考えているのか』という着眼点をもって聞くようになったのは確かである。そういう意味では、請戸小学校を訪れたことはツアーにおける学びのターニングポイントになったといえる。

総じて、長いようで実際はあっという間だった、そんな4泊5日の福島スタディツアーを終えて、私は沢山の学びや発見を得ることができた。帰宅してから数日経つが、未だに頭の中は整理しきれていない。冒頭で福島のイメージが変わったといったが、今なお解決に向けて取り組まれている課題があるという事実もそこに含まれる。自助の在り方、行政の限界、地域コミュニティの再形成、エネルギー問題、メディアの実態、平等や公平について…知れば知るほど複雑である。だから、今回の学びや発見のすべてを、忠実にこの報告文へ起こすことは不可能である。しかし、今感じていることを自分の言葉で書き記したこの文章が、記憶として、誰かの気づきや振り返りに役立つなら幸いである。



太田雄斗(文学部・実践真宗学科 2年次生)

2022年8月6日から10日までの5日間、福島スタディツアーに参加した。5日間で福島県の浜通りや中通りの街を訪れ、現地に住む様々な立場の方からお話を伺った。5日間で学んだことはすぐには整理しきれないほど、多かった。今回は学びの中で特に書き記しておきたいものを私なりに整理しお伝えする。

ツアー初日、福島に向かうバスの車内で、福島に対しそれぞれが持つイメージを参加者間で共有した。その時私は、「日本のいまが詰まっている場所」だと話した。現地に行き実態に触れたとき、そ

の思いはさらに強まった。

日本是世界でも特に災害の多い国である。福島県はここ数十年という短い期間に地震や津波、台風や豪雨など数多くの災害が発生している県である。今年3月には福島県沖地震が発生したが、南相馬市では被害にあった箇所が複数確認できた。今回の研修で出会った方々は、みなさんが口をそろえて11年前の東日本大震災(以下大震災と記す)よりも強い揺れだったと話していた。南相馬市ではこの地震で最大震度6強を観測しており、これは大震災の同市の最大観測震度を超

えるものであった。南相馬市社会福祉協議会の青田さんは、「災害は忘れる前にやってくる」と話していた。まさに地震大国日本、そこに住むのは私も同じである。事態が発生する前だからこそできる備えがある。過去の教訓から備えを学び、今後に生かさなければいけないと感じた。

地震は、発生の仕方や場所によって津波を引き起こすことがある。世界で津波という言葉がそのまま使われるように、世界的に特に津波による被害が多いのが日本である。研修では津波被害についても学んだ。震災遺構の浪江町立請戸小学校では、建物等に津波の形跡が刻まれていた。また、小学校の周辺にあった請戸地区は沿岸部に位置していたこともあり壊滅的な被害を受けたという。2階に展示されていた当時の写真には、小学校の建物以外辺り一面の建物が一切なくなり、まるで小学校が海上にあるかのようにになっている地区の様子が写されていた。津波の威力を目の当たりにし、ふと自分の街も津波が来たらこうなるのかと考えた時、背筋が震えるような感覚に襲われた。

大震災では原子力災害も発生した。国道6号線沿いには今も数多くの立ち入り制限区域や当時のまま残された建物があった。自分の家なのに住むことどころか自由に入る事すら許されない。1



震災遺構 請戸小学校

取り残されたかのように小学校の周囲には建物が無い。草木の高さが震災後の年月わわ思わせる。11年経った今も止まったままの時間を感じた。この小学校はこれからどうなるのだろうか。

1年経った今もそのような人がいるという現実を体感した。一方で意外だと感じた事もあった。私は風評被害について、福島県内ではその程度の差はあるものの、どこもが被害を受けていると考えていた。実際に民芸品店を営む男性は、「震災後、観光客は大きく減少し廃業を考えるほどだった」と話した。一方で、南相馬市で野菜を直売する女性からは風評被害はなかったとの声が聞かれた。

他にも原子力災害に関連し、災害に対する補償や健康被害、労働者やメディア、政治など数多くの問題が複雑に絡みあいながら存在している事を知った。話を聞き、それらの問題に触れるたび、その背後に見え隠れする得体のしれない大きなものの存在を感じた。未だそれが何かは分からない。これらの問題は少し触れただけでは到底本質がつかめない、根深いものなのかもしれない。このように、福島県は日本が今考えるべき社会問題、日本の現状がある場所だと感じた私はより一層福島県の抱える数多くの問題に向きあい、そこから日本の社会問題を少しでも解決するためのヒントを見つけたいと思った。いつか再び福島を訪れ、新たな視点から福島のいまを見る旅をするだろう



国道6号線沿い

ここではランドセルや写真など津波で流された遺品が数多く並べられ、持ち主へと帰る日を待っていたようだ。震災から10年の2021年に店主の方は活動をやめる決断をされたとのこと。復興五輪といわれたオリンピックが開催されたあの年、現地の人中には決断を迫られた人もいたのだと実感した。

今回の福島スタディツアーは、2022年8月6日から8月10日の4泊5日で行われた。この4泊5日で9つもの場所を回りお話を聞き、とても充実した5日間を過ごした。その中でも私が東日本大震災について最も学べたなど感じ、とても印象に残っているプログラムとして3つ挙げられる。



東日本大震災被災・原子力災害伝承館

まず1つ目は、原子力災害伝承館の施設見学である。まず、この原子力災害伝承館のある場所は双葉町中野地区である。この地区は、津波により一度浸水、原発事故により避難指示を受けたが、原発事故から約九年後の2020年に一部避難指示が解除された土地であるなどのような地区である。つい最近一部避難指示が解除された土地であるからなのか、実際にバスでこの地区に入った瞬間、道中に人があまりいないことからの静けさがすごく何か私の中で強く圧倒されたことを覚えている。そして、この原子力災害伝承館の施設の初めには震災前の福島県について、農林水産業が盛んな土地であり、昔ながらの伝統を受け継いできた豊かな文化と歴史が息づく地域あったということが書かれていた。そのまま施設見学を続けていくと、酪農家が絞らないと病気になるからと牛の乳を絞っては捨てている写真があったりと、震災後の福島県産

の食べ物への風評被害がとてもひどいことを学んだ。これらのことから、元々の福島県の良さが原発事故によって大きく消されてしまったのかと考えた。また、「原子力明るい未来のエネルギー」という標語が大きく飾られているのを見た。福島県民は、原子力は絶対に安全なものであると小さな頃から教えられてきたというお話も聞き、もし原発事故が起きたらその後どうするのかについてもっと教えてもらうべきであったらと考えしまい、この標語を見るととても心が痛んだ。

2つ目は、双葉駅である。双葉町は、未だ帰ってこれない地域(R4年8月7日現在)である。双葉町は原発の避難指示が出た後、約7000人が一斉に避難したことや放射線の影響で道路が大渋滞し、人々の大混乱を招いたというお話を聞いた。未だ復興していない地域であっても、その双葉町の中にある建物には大きく様々な絵が書いてあり、復興への努力がとても窺えたプログラムであった。



震災遺構請戸小学校の見学

3つ目は、請戸小学校の見学である。請戸小学校では、津波の影響を受けたままの状態で見学できるようになっており、体育館の床が大きく盛り上がっていたり、教室のドアが津波に押し流されたことによって反対側の教室まで移動していたり、実際にその光景を見

たからこそ津波の恐ろしさを改めて強く感じた。また、元請戸小学校の生徒の書いた作文が展示されていた。そこには、東日本大震災を乗り越えたからこそ強くなったのだと感じる元生徒の気持ちや、故郷への愛が綴られていた。やはりあれだけの大きな震災に遭い、大好きな故郷や友達とも急に離れないといけなくなる環境に陥ると、心が強くなるのかもしれないと感じた。

今回の福島スタディツアーでは、東日本大震災について本当に深く学べたと感じる。私が小学3年生の頃、テレビで見ていたあの福島県に実際に足を運べ、実際に自分の目で見たからこそ、津波や原発事故の恐ろしさ、福島県民の復興への努力を強く感じられた。とても心に響くことが多く、私も復興のお手伝いがしたいと何度も心の底から感じるプログラムであった。



中村あや(社会学部現代福祉学科 2年次生)

人の記憶はだんだん忘れられていく。東日本大震災からはや11年、震災被害の影響の少ない地域の人たちは変わらない日常を過ごしている。自分もその中の一人であった。しかし福島に来て、まだ震災の日から時間が動いていない場所もあると感じた。フィールドワーク初日の原子力災害伝承館から双葉駅に向かうまでバスからの車窓で見たのは壊れかけのままの建物であった。これが「震災後、そのまま残っている建物」と聞くまでは荒れ果てた建造物があると不思議に思うくらいで注視していなかったが、違和感がとれて確信に変わったとき心が痛くなった。双葉駅には津波が来た時刻で止まったままの時計があった。止まる時計をこれからも残していくのか、動かすのかそう問われたら、私は残してほしいと思った。秒針は止まり静かであったが、あの日を忘れてはならないというメッセージが伝わった。

福島原発の被害を受けた双葉町の駅周辺には、街には大きなアート作品があちこちに見られた。一度は被害にあってしまった場所も

地域の力で状態を見て福島の大きな進歩を感じた。



双葉町駅前の壁面アート

浪江町の道の駅なみえでは多くの人が賑わい、子供向けのイベントも行われていた。被災地と思えないくらい整備された施設だった。

双葉町の帰還困難区域をバスで通った。今もなお人が歩けない場所が存在している。そのような場所は道の駅とは打って変わってがらんとしていた。人が誰一人歩いていないことと、放射能の影響で帰ることが自由にでき

ない人の家が点々とあることの虚しさ、悲しさが震災当時のまま残る景色が物語っていた。



道の駅なみえに併設されている公園

私は震災当時小学2年生であり、いまは大学2年になった。11年はこれほど長いのに、まだ建物が整備されていない所や原発の被害で人が住めない地域があったことを目の当たりにして驚愕した。もし自分の家にバリケードが張られていて政府の許可が下りなければ家に帰れなかったらと想像したがそれは想像の中だけで終わってほしいと感じた。一時帰宅が許された地区は放射線量が多いため自宅に帰るには防護服を着なければならなかった。しかも持ち帰れる荷物は一抱えの荷物のみ。今の時代と似ていると思ったのは、外出するときはマスクを付けなければならず、帰省などは自粛しなければならないことだ。当たり前前のが制限され、家族と会おうにも会えない。私も下宿から地元に戻れないとき

は再会できることを待ち望んでいた。だから痛いほど気持ちが分かる。だからといって全員が住んでいた地域に帰りたいという訳ではないと語り部の方がお話してくれた。私の地元にも原発があり、家からは遠いところにあるのでさほど危惧していなかった。そして、震災前の原発周辺に住む人たちは巨大な津波によって引き起こされる原発被害などは想定していなかったのだろう、「原子力未来の明るいエネルギー」と標語も謳われていた。被災し、亡くなった方もいるので、危険だからと帰るのを躊躇う周辺住民の気持ちは共感できる。しかし原子力は僅かなエネルギーで大きな力と脱炭素で温暖化にも貢献できる。それに今まで知らなかったが原発を設置する場所は政府からリスクと同時に莫大な資金を得ているということだ。私の地元の経済もそのおかげで回っていたのかもしれない。確かに原発は震災の影響で悪いイメージがついているが、日本に災害ばかりをもたらすわけではない。自分の中で二択の答えでは難しい問題に葛藤している。このスタディツアーで見たことは全て自分事として考えていた。震災が起こったとき、その後の対応も一人では助からない。緊急で避難所を確保する場所を把握できているか、近くに高齢者、子供、外国人がいて頼る人がいるのか自分の周辺の状況を知っておかなければならないと分かった。現地を訪れないと分からない体験ができて貴重な時間を過ごすことができた。



私は3.11 当時の様子をテレビでは見ていた。それ以来、復興支援で活動しているボランティアに興味を持ち、今回の福島スタディツアーに参加した。まず、福島スタディツアーに参加する前に福島の沿岸部の様子について考えてみた。復興は進んでいるが人は少なく、被害が大きかった地域は更地であると想像していた。結論から言うと、人にはあまり出会えず、更地になった場所は草木が生えたり、沢山の太陽光パネルが広がっていた。今回のスタディツアーで、新たに発見したことや現地の人の話を聞いて、印象に残った3つを紹介していく。



震災当時のままで保存されている請戸小学校

一つ目は、浪江町立請戸小学校だ。この小学校は海から 300m の所に位置しており、震災の際、校舎二階部分まで浸水する大津波に襲われたが、当時校舎に残っていた児童 82 名全員が無事に避難できた。震災遺構として保存されており、見学した。津波が直撃し、そのままの状態が残っているので小学校の中は、複合盤が壁から外れ、教室の窓ガラスの破片や当時使っていた教科書などそのままの状態が残されていた。その光景を目撃し、改めて津波の恐ろしさを痛感した。私の地元愛媛県は南海トラフ巨大地震被害想定内範囲に入っていて、津波はあまり来ないと言われて

いるが、他人事ではなく自分のこととして受け止めた。

二つ目は、“さぼーとセンターぴあ”の青田さんの話だ。青田さんから様々な話を伺ったが、その中でも印象に残っているのが「てんでんこ」という考え方だ。てんでんことは「てんでんバラバラで逃げる」という意味で、東北地方の人たちにとっては大切な言葉らしい。震災当時、津波が来ている中で、多くの人が家に残されていた家族を助けに戻り亡くなった。それでも、被害を最小限済んだのはこのてんでんこで、家に戻らず、自分の周りの人も含めて逃げるという根強いコミュニティの形成ができていたからこそだと仰っていた。現在、私達の生活の中心は携帯電話であるが、実際に震災に遭うと制限が掛かり使えなくなる。その上、現在新型コロナウイルスの影響で近隣住民に限らず、交流が減っている。そんな中で、てんでんこなる行動が咄嗟に出来るだろうかという疑問を持った。青田さんの話を通して、現在上記の弊害があるからこそ、自身周辺のコミュニティは形成すべきだと感じ、まず自分の命を優先させるべきであるが、その中で共助の精神も培っていくべきであると考えた。



青田さんのお話を聞いているところ

三つ目は、阿部農園への訪問だ。阿部農園は

福島市に位置しており、梨を育てている。原発から 50km 以上は離れているが、放射性物質を取り除くための除染作業を行った農園の一つである。除染作業では農園の表土の入れ替えも行い、梨の木の皮を手作業で剥ぎ、農園の木を 34 本も切るなど、相当の被害に遭っていた。除染した土や木の皮はフレコンバックに入れて保存していたが、国の施策の遅れで回収がかなり遅れ、他の畑では、取り除いた木の皮が道路に散乱してしまっていた場所もあったようだ。福島県は今まで放射能等の影響で様々な風評被害にあっている。阿部農園の一子さんは放射性物質能度の測定を自費でより厳しい基準で検査し、梨を購入してくれる人たちに公開するなど細やかな取り組みのおかげで風評被害は無かったと仰っていたが、大多数

の人たちはこのような風評被害で苦しんでいたことを話から感じた。

全ての日程を通して、今まで震災復興の様子はテレビでしか見たことが無かったが、実際に現地の人の話を聞いていると、見えていないところでも多くの人が様々な思いを抱えながら今現在も生活していることを活動を通して感じた。3.11 から 10 年以上経過し、人々の記憶が薄いものになっていると後日周囲の意見を聞いても感じたので、実際に自分が感じたことや考えたことを周囲の人に伝え続けていくことの大切さを改めて知り、忘れ去ってはいけない経験としてこれから周囲の人や興味ある人に伝え続けていきたい。



田村勝哉(政策学部・政策学科 2 年次生)

東日本大震災の発生から 11 年を迎えた 2022 年。これまで私は、メディアを通して東北の震災当時の状況やその後の復興などの情報を得てきた。そうしたなか、今回の福島スタディツアーが実施されることを知った私は、実際に訪問し五感を通して学ぶことで、これまでとは異なる視点から東北・福島を考え、知見を深めることができるのではと考えるようになり、今回のツアーへの参加を決めた。

スタディツアーで私が最も強く感じたのは、福島には地震、津波の被害に加え「原発事故」という他県にはない大きな爪痕が残されたということ、そしてそれが今なお福島に暗い影を落としているということである。ツアー 2 日目に訪問した浪江町の沿岸部には、震災後、災害危険区域に指定さ

れ、住宅の再建ができずに更地となった場所がある。そうした更地を活用しようと太陽光パネルの設置が行われたり、農地・公園などに整備されていることを知った。今や住宅が 1 軒も見当たらないその土地には、複数の家があり、生活の営みが確かにあったことを忘れてはならないと思った。また、自分の土地に家の再建が叶わず、元の生活を取り戻せない人々の存在も忘れてはならないと思った。同日、放射線量が非常に高く避難指示が(R4 年 8 月 7 日)現在も続いている「帰還困難区域」の町並みをバスの車窓から視察した。住宅や商業施設が震災当時のまま放置されており、建物やその周囲は草木が生い茂り荒廃が進んでいた。脇道へと続く道路沿いや建物の入り口には通行止めの看板やバリケードが設置され、原発被害の実

態、深刻さを身に染みて感じた。原発事故によって突然故郷を追われ、11年経った今も避難生活を余儀なくされている人々がいることや、3日目の市民公益活動パートナーズさんでのヒアリングで伺った、東京電力の賠償金をめぐり住民の中で分断が起きていたという現実に触れることで、私は原発事故が福島に与えた影響は計り知れないものだったことを実感した。



鳥崎海岸公園で星さんのお話を伺う。奥に見えるのが原町火力発電所

今回のツアーでは、震災後の復興に向けた新たな取り組みにも学ぶべき点があったように感じる。2日目に訪問した「道の駅 なみえ」は、浪江町の復興のシンボルとして2020年にオープンした商業施設で、地元の生鮮食品やお土産、日本酒などの特産品を販売するほか、良品計画、ポケモンとの連携協定締結による無印良品の店舗の出店、「ラッキー公園」の整備など、全国的に見ても珍しい地域振興の取り組みがなされていた。道の駅が町の新たなにぎわいの場として中心的な

役割を果たしているという点でも、参考になる事例であった。4日目に訪問した土湯温泉は、震災による風評被害で宿泊客が激減し旅館の廃業も相次いだという。その後地元の有志によって復興計画が立てられ、地熱発電と小水力発電の自然を活かしたエネルギー事業やエビの養殖、醸造所の開業など、様々なアプローチで復興再生のまちづくりが行われている。外部からの資源に頼るのではなく、元々あった地域資源を活かし持続可能な復興事業を展開されているのが印象的だった。

これまでの私は被災地の復興は順調に進んでいると思っていたが、それは福島県や東北という大きな単位で見ていたからであり、市区町村、地区単位で見るとまだ順調とは言えない地域もあるということに気づいた。そして、本当の意味での「復興」とは何か、またそれが成し遂げられるためには何が必要で、自分には何ができるのかという問いが新たに生まれた。この問いを明らかにするためにも、私はこれからも東北・福島について学び続けていきたいと思う。



東日本大震災・原子力災害伝承館

龍谷大学ボランティア・NPO活動センター

ホームページ：<http://www.ryukoku.ac.jp/npo/>
E-mail: ryuvnc@ad.ryukoku.ac.jp

深草：〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
TEL：075-645-2047 Fax:075-645-2064

瀬田：〒520-2194 大津市瀬田大江町横谷1-5
TEL：077-544-7252 Fax:077-544-7261